

# 人魚の瞳、海の青

Nana Kiera Ichikawa

「少女たち」

チズ 大人っぽい容姿と、常に冷静な立ち振る舞いから他の少女からは一目置かれている。何を考えているか分からない存在だが、全員と仲が悪いわけではない。産まれたときから、妹のキズとこの施設で育ち、キズを守る存在は自分しかない、という責任感と共に成長した。キズを逃すために、外の世界へ三日間逃亡した経験があり、外の世界を見てから自分たちの運命に疑問を呈するようになる。絵本の世界しか知らない他の少女たちに絶望すると同時に、この状況を打破することに対しての願望は一番強い。アサはチズにとって特別な存在であり、唯一甘えられる存在であった。また、外の世界で処女を失っており、そんな身体の変化も、彼女を悩ませる要因になる。

アサ 少女たちの中で最年長。全員からリーダーとして親しまれるため、その役割を引き受けているが、実際は自分に自信がなく弱い部分を隠している。自分の弱さを受け入れているため、他人の痛みや弱さもちゃんと理解でき、行動できる。毎晩寝る前は絵本を全員に読み聞かせている。絶望的な状況の中、かすかな希望や光を少女たちに与えようと常に気を遣っている。

ゾミ 本名はノゾミ。しかし、自分には似合わない名前だと信じ込み、最初のノを捨てゾミと名乗っている。軽い学習障害と自分の容姿にコンプレックスを抱え、それゆえに自分に自信がもてない。髪の毛がとても綺麗であり、ポニーテールで結っている。美しく、弱いキサキに恋をしており、彼女に近づいたり、触れたりする度に、行き場のない想いで苦しくなる。ユウヒを敵対視しているが、勝ち目はなく心はどこかで理解している。

キサキ 生まれつき右足が動かない。常に松葉杖を持って歩いており、誰かの助けを求めている。身体も病弱であり、完全に健康である状態になったことがない。しかし、容姿には恵まれ、少女たちの中では一番の美貌をもつ。全員から、最年少の妹のように扱われ、本人も全員を姉のように慕っている。だが、実際はかなりの現実主義であり、自分たちの状況や未来もちゃんと把握している。

ユウヒ キズがいなくなってから、違う教室から移されて来たまだ一年目の新人。少年のようなルックスで、言動や動作もスマート。頭もよく、キサキから好かれる。キサキからの好意は受け入れているが、実際「好き」という感情の意味はユウヒの中では曖昧である。ゾミから好かれていないことにも、薄々気付いている。

キズ チズの双子の妹。二卵性なので顔は似ていないが、姉妹の面影はある。教室にいた頃は、頭がよく器用なことで有名。習ったこともないピアノを弾きこなし、身体に変化があったことを半年間先生から隠し通した事など、今では「伝説」扱いされている。

先生 白い教室を担当する大人の女性。黒いスーツに黒いヒール。

#### 「場所」

1、 白い教室（命の工場の二室）

白い机、白い椅子。

白いピアノに、白い身長測定器。

白い本棚とその中に入っている、色鮮やかな本。

白い「教室」と呼ばれている空間で劇は進行する。

小さい扉は少女たちの寝室へと繋がっており、大きい扉は、外の世界へと繋がっている。

（あくまで設定であり、劇中では教室以外の空間は使用しない）

2、 海

チズが大人になってから訪れる海。

青の色が綺麗であることで有名であり、波は穏やかである。

\*本作品は、ハンス・クリスチャン・アンデルセンの人魚姫を引用しています

「第一場」波と旋律

遠くから聞こえてくる、ピアノの繊細な旋律。

波の音。風の音。砂浜の音。

一人の女性が、波打ち際までゆっくりと歩いて来る。

砂浜に座り、落ちて行く太陽を見つめる。

チズ　ごめんね

チズ、ゆっくりとポケットから紙切れを取り出す。

その紙切れに書いてある文章を、小さな声で読み上げる。

チズ　ゆっくりと、雲の上へ、昇っていきました

チズ、懐かしそうに笑う。

チズ　皆が大好きな場所だったんだよ。久々だなあ、ここまで来たの。なんか、来るのが少し怖くて。(小さく笑って)でも、やっぱり何も変わってない。皆、元気かな

チズ、遠くを見て笑う。

チズ　人魚姫の話、もう覚えちゃった？　何回話したかな。最初の部分、皆でよく言ってた。はるか沖へでると、海の水は矢車草よりも深い青で、水晶よりも澄み切っていました。いかり網が一番底に届かないくらい

声　鬼さんこちら、手のなる方へ

アサ　深い、深い、海の底

アサ、チズの隣に座りながら物語の続きを呟く。

チズ、言葉を失う。

チズ　え

アサ　完璧、よく覚えてました

チズ　アサちゃん

アサ　元気だった、チズ

チズ どうしてここに

アサ (紙切れをチズの手からとって) これ、まだ持っていてくれてるんだ  
チズ もちろん

アサ (笑って) もうそんな必要ないのに

チズ でも、アサちゃんに頼まれた事だったから

アサ やっぱりチズだなあ

チズ あれからずっと持つてる

アサ ありがとう

チズ アサちゃーん！ーん！！ アサちゃーん！ーん！！

波の音にのって、過去のチズの声が遠くから聞こえる。

苦しそうな叫び声。アサちゃんを探す声。

チズ、隣にいるアサの顔を見ながら表情が固くなる。

チズ あの時、

アサ なに

チズ なんでもない

アサ もう、チズっていつも元気なさそうな顔して

チズ そう

アサ 見て、(海を指差して) きらきらしてる

チズ 本当だ

アサ 太陽が落ちるときが一番きれい

チズ うん

アサ 何か遊ぶ？

チズ え？

アサ 砂遊びとか、お城つくったりとか、海に飛び込むのもいいね！何かしたいことある？

チズ あ、でも、わたし・・

アサ なに？

チズ もう、できないよ

アサ どうして？

チズ それは

アサ 大人になっちゃった？

チズ そう、なのかな

アサ、チズの手をとる。

アサ 戻ろう  
チズ え？  
アサ (笑って) 私たちが子供だった頃  
チズ どういうこと  
アサ 私のこと、信じて  
チズ アサちゃん、でも  
アサ 皆で遊ぼう、昔みたいに

アサ、チズの持っている紙切れをそっと手にとり、自分のポケットに大切そうにしまう。

アサとチズの手が触れ合う。

「記憶」がはじまる。

記憶の欠片を集めたような、美しい旋律。

二人が向かうその先は、埃をかぶった、白い「教室」。  
ピアノの音色と共に記憶が少しずつ、形になっていく。

チズ、声や表情が少しずつ幼くなっていく。

アサ 連れて行くよ  
チズ どこに  
アサ あの時に  
チズ あの頃に？  
アサ 覚えてる？  
チズ なにを？  
アサ 私たちのこと  
チズ もちろん  
アサ 笑ったこと  
チズ 泣いたこと  
アサ あの時好きだったことも  
チズ まだ覚えてる  
アサ チズ  
チズ ねえ、これ  
アサ この身長測定器

チズ、身長測定器にかかっている布をはずす。

チズ 毎日、二人で計った

アサ この机

チズ この椅子も！

二人、次々と布をはずしていく。

アサ、チズのコートを脱がせる。

チズ、アサやキズと同じ、水色のシャツに白いスカートの格好になる。

チズ 毎日勉強して、

アサ 笑って

チズ 喧嘩して

アサ 怒られて

チズ この本棚

アサ この本

チズ 人魚姫だ

アサ 懐かしい

チズ ここで

アサ この場所で

チズ ずっと考えてた

アサ なにを？

チズ ずっと不思議だった

アサ どんなこと？

チズ アサちゃんのこと

アサ わたしのこと？

チズ アサちゃんは人魚になったの？

アサ なったよ

チズ 自由に泳いでる？

アサ 泳いでる

チズ 魚、見た？

アサ 見たよ、この目で

チズ 夢、叶った？

アサ 叶ったよ、なにもかも

チズ 今、幸せ？

アサ もちろん

チズ 本当に？

アサ うん

チズ アサちゃんとなら、どこへでも行ける気がした。そんな気がした。皆といたら、あの夜空に輝く星にも、この一面に広がる白い砂にも。今聞こえて来るこの音にだってなれる気がした。自分たちが何から産まれて、どこへ行くのか、そんなこと分からなかった日々だったけど。アサちゃん、私、今、伝えたいことがあるの。だからここに、戻って来たよ

タイトルロール

『人魚の瞳、海の青』

文字が、壁に映し出されるように現れる。  
そして、音楽と共に消えていく。

「第二場」朝

ジリリリリ

けたたましく、学校のベルが鳴る。

気持ちのいいくらいに白い「教室」

白い机、白い椅子。白いピアノに、白い身長測定器。

白い本棚とその中に入っている、色鮮やかな本。

そして、小さい扉と大きい扉。

大きい扉から、黒いスーツを着た大人の先生が入って来る。

小さい扉から、白いシャツに水色のスカートを身につけている少女たちが一斉に出てくる。

全員、同時に席につく。

先生 おはようございます

全員 おはようございます

先生 今日の報告を、お願いします。出席番号1番、

アサ、手を上げ立ち上がる。

アサ はい、体温 36.5。今日も朝から食欲旺盛異常な事です  
先生 素晴らしい。2番

2番の席が、空っぽである。

先生 あら、2番は？

少女たち、顔を見合わせ、またか、という表情をする。

先生 (ため息をついて)あとで、呼びに行くわ。飛ばして、3番。

ユウヒ はい、体温 36.7。今日も元気です

先生 いつも通り、完璧ね。今日であなたが来て一年になるわね

ユウヒ 覚えててくれたんですね

先生 これからも今まで通り完璧でいてちょうだい。4番、

ユウヒ、座ると同時にゾミが立ち上がる。

ゾミ はい、体温 35.4。完璧な3番が、昨日夕食のブロッコリーを捨てるのを見ました

ユウヒ ちょっと

先生 4番、3番がそんなことするわけないでしょ

ゾミ (焦って)いや、でもめっちゃブロッコリー捨ててました

先生 (遮って)嘘はほどほどにしない。5番、

ゾミ、渋々座るとキサキ、松葉杖をつきながら弱々しく立ち上がる。

キサキ はい、体温 35.1。ごめんなさい、ずっと体調が優れないんです

少女たち、キサキに素早く目配せをする。

キサキ、はっと何かを思い出す。

キサキ あ、いえ。えっと、すごく元気です

先生 (呆れて)5番、あなた本当にいつも顔色が悪いわよ。今日中に、保健室の先生を呼んでくるわ

キサキ はい、迷惑かけてごめんなさい

キサキ、座る。

先生 今日の授業、ちゃんと準備しておくように  
全員 はい

先生 皆、髪の手入れはちゃんとしている？

ゾミ (小声で) またきた

アサ (ゾミの愚痴を打ち消すように) もちろん

キサキ 毎日、必ず

先生 今日綺麗な色だわ、これからも永遠にね

チズ、教室に入って来る。

全員の視線がささる。

先生 2番、今日も遅刻ね

チズ 体温、36.7。健康です。ごめんなさい、最近寝付きが悪くて

先生 最近？ここずっとでしょう？

チズ ごめんなさい

先生 (メモしながら) まあいいわ、健康でいる限り、なんでも

先生、その場を去る。

チズ、先生の背中を追う。

ベルの音。

少女たち、緊張感が抜け一気に肩の力が抜ける。

チズ ここは

ゾミ もう、このために朝起きるの本当無理ー

アサ ゾミはいつも眠そうなんだから

ゾミ いくら寝ても眠いの

チズ そうだ

キサキ でも、ちゃんと私のこと起こしてくれるんだよ

ゾミ キサキ！

アサ 本当は優しいんだから

ユウヒ 皆、教科書ちゃんとチェックしてね！

チズ ユウヒはいつもそう言ってて

ゾミ ユウヒに言われる前にちゃんとしますう

チズ ゾミはいつも口を尖らせてて

キサキ (ユウヒに) いつもありがとう

ユウヒ キサキ、今日ほどの本読むの？

キサキ うーん、どれにしよう

ゾミ 私も一緒に読む

ユウヒ 私も

ゾミ えー

チズ キサキは絵本が大好きで

キサキ 授業おわったら一緒に決めよ

ゾミ うん

アサ チズ！

チズ アサちゃんは・・

アサ もう、お寝坊さん

チズ 違う、ちよつと疲れてただけ

アサ これ以上先生困らせちゃ駄目だよ

チズ ごめんね

アサ 授業、準備した？

チズ 準備ったって、教科書一冊じゃない

キサキ ゾミはそれ 5回もなくしてるけど！

ゾミ キサキってば！

チズ 毎日、同じことの繰り返し。歌って、音楽聞いて、歌って、音楽聞いて

アサ チズ、仕方ないでしょ

チズ (ため息) そうだけど

アサ 今日楽しく、ほら

チズ (笑って) うん

アサ 皆、今日ほどの曲聞きたい？

アサの周りに、少女たちが集まる。  
チズ、その様子を横目に見る。

チズ 毎朝の、体温と健康チェック。授業は、  
先生 はい、皆準備して。今日は、ドビュッシーを聞くわよ  
ゾミ あーそれめっちゃ眠くなるやつ  
ユウヒ ゾミ、座って

チズ 音楽しかない。音楽を聞くのは私たちの心を落ち着かせるため。そう、ここはそういうところ。私たちの、教室。太陽を一度も見なかったことのない私たちが、一番楽しみにしていたのが・・